

東京外かく環状道路（関越～東名） 環境モニタリング調査（大気質、粉じん等）の結果について（お知らせ）

東名 JCT（仮称）周辺 大気質、粉じん等調査

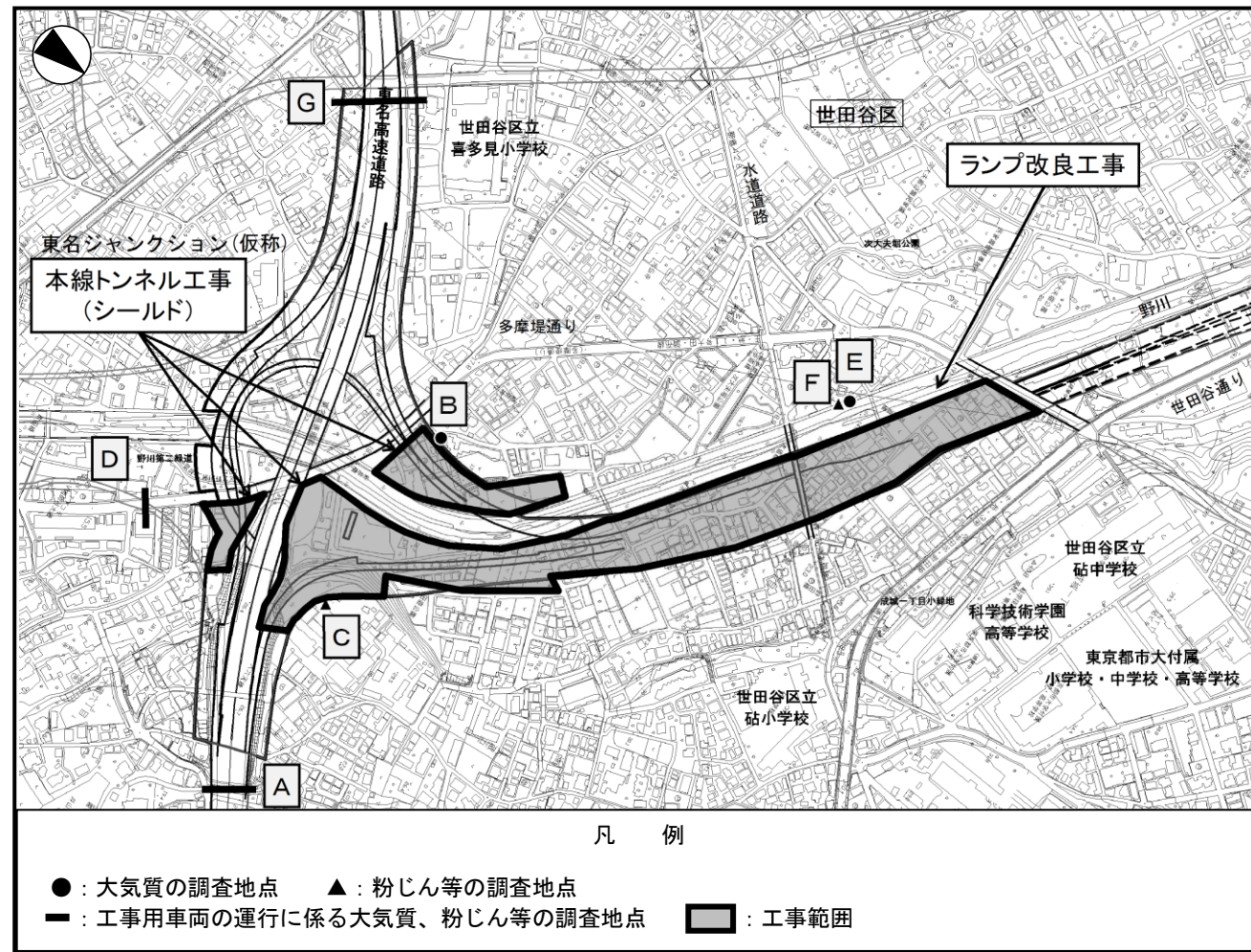
夏季（令和5年6月～令和5年8月）に実施した大気質、粉じん等調査の結果についてお知らせします。

◆調査期間

夏季

- 大気質：令和5年6月7日（水）～6月13日（火）（7日間）
令和5年6月8日（木）～6月14日（水）（7日間）
- 粉じん等：令和5年6月5日（月）～7月5日（水）（1ヶ月間）

◆調査位置図



◆問い合わせ

担当窓口：国土交通省関東地方整備局 東京外かく環状国道事務所 計画課
電話番号：0120-34-1491（外環専用フリーダイヤル 平日9：15～18：00）

◆調査結果

○建設機械の稼働に係る大気質【二酸化窒素（NO₂）、浮遊粒子状物質（SPM）】

- 二酸化窒素（NO₂）については、いずれも環境基準を下回る結果となっています。
- 浮遊粒子状物質（SPM）については、1日平均値、1時間値ともにいずれも環境基準を下回る結果となっています。

調査日	E		
	NO ₂ (ppm)	SPM (mg/m ³)	
	1日平均値	1日平均値	1時間値の最大値
6月7日	0.008	0.016	0.026
6月8日	0.011	0.017	0.025
6月9日	0.015	0.011	0.020
6月10日	0.009	0.016	0.027
6月11日	0.008	0.018	0.047
6月12日	0.017	0.017	0.035
6月13日	0.009	0.015	0.022
期間内平均	0.011	0.016	—

※ 調査地点Bの周辺では、6月～8月は工事が行われなかったため、調査を実施していません。

○工事用車両の運行に係る大気質【二酸化窒素（NO₂）、浮遊粒子状物質（SPM）】

- 二酸化窒素（NO₂）については、いずれも環境基準を下回る結果となっています。
- 浮遊粒子状物質（SPM）については、1日平均値、1時間値ともにいずれも環境基準を下回る結果となっています。

調査日	A			調査日	D		
	NO ₂ (ppm)	SPM (mg/m ³)			NO ₂ (ppm)	SPM (mg/m ³)	
	1日平均値	1日平均値	1時間値の最大値		1日平均値	1日平均値	1時間値の最大値
6月8日	0.013	0.017	0.023	6月8日	0.017	0.020	0.031
6月9日	0.017	0.012	0.023	6月9日	0.023	0.016	0.026
6月10日	0.009	0.017	0.031	6月10日	0.012	0.019	0.027
6月11日	0.010	0.021	0.058	6月11日	0.011	0.020	0.055
6月12日	0.019	0.020	0.040	6月12日	0.021	0.020	0.041
6月13日	0.009	0.017	0.026	6月13日	0.012	0.016	0.023
6月14日	0.011	0.017	0.027	6月14日	0.014	0.019	0.035
期間内平均	0.013	0.017	—	期間内平均	0.016	0.019	—

※ 調査地点Gの周辺では、6月～8月は工事用車両が通行しなかったため、調査を実施していません。

○建設機械の稼働に係る粉じん等

- 粉じん等（降下ばいじん量）については、いずれも参考値を下回る結果となっています。

調査時期	C	F
夏季	1.8	8.5

○工事用車両の運行に係る粉じん等

- 粉じん等（降下ばいじん量）については、いずれも参考値を下回る結果となっています。

調査時期	A	D
夏季	2.0	2.4

※ 調査地点Gの周辺では、6月～8月は工事用車両が通行しなかったため、調査を実施していません。

参考

◆環境基準

二酸化窒素：1時間値の1日平均値が0.04ppmから0.06ppmまでのゾーン内又はそれ以下であること。
（「二酸化窒素に係る環境基準について」（環境庁告示））
浮遊粒子状物質：1時間値の1日平均値が0.10mg/m³以下であり、かつ、1時間値が0.20mg/m³以下であること。
（「大気の汚染に係る環境基準について」（環境庁告示））

※環境基準との評価は、『道路環境影響評価の技術手法』に基づいて、1年間の測定を通じて得られた1日平均値のうち、低い方から数えて98%目（若しくは高い方から数えて2%目）にあたる値を環境基準と比較することにより行います。

◆参考値

降下ばいじん量：20t/km²/月以下

※降下ばいじん量に環境基準はありません。環境を保全する上での降下ばいじん量は、スパイクタイヤ粉じんにおける生活環境の保全が必要な地域の指標*を参考とした20t/km²/月が目安と考えられます。（「道路環境影響評価の技術手法（平成24年度版）」より引用）
なお、計測されるばいじん量は建設機械以外から発生するものも含まれるため、環境影響評価では、上記基準を達成するよう、建設機械の稼働の寄与分を10t/km²/月以下とするよう評価を行っています。

*「スパイクタイヤ粉じんの発生の防止に関する法律の施行について」（平成2年7月3日、環大自第84号）